



「森井先生のこと」 (その1)

真崎 隆治

明治学院にかかわる人々のなかで、もっとも長く、また深くおつきあいいただいている方は森井先生である。先生の名をはじめて知ったのは1960年ごろ、プロワの『ジャン・カルヴァン』の翻訳者としてであった。魅力的な原文と明快な訳文に惹かれて、これは学生時代の愛読書のひとつとなり、ついに訳者に手紙を出すまでになった。ファン・レターは後にも先にもこれ一つである。ただ、内容は覚えていない。なにやら夢中になって感激を語ったのだと思う。そんな無責任な手紙にたいして、森井先生はなんと返事をくださった。まったく期待していないことだったので、またまた感激した。それははがきにびっしり文字の並ぶ丁重なもので、万年筆で書かれたブルーの太い文字は、今にいたるも変わらない森井先生の文字のトレード・マークである。

大学卒業後、神学を学び伝道者になろうと、東京神学大学に入った。森井先生は当時この大学で非常勤講師として西洋史を教えておられた。ぼくは学士入学なので一般教育科目をとる必要がなく、先生の授業にふれることもなかった。その2年目の夏のことである。事務室から呼ばれて行ってみると、森井先生からの推薦だが、インド人の神学者が論文に使用している英語版『キリスト教綱要』その他の引用箇所が原典のどこにあるかを調べるアルバイトをしないか、ということであった。森井先生は例のファン・レターによってぼく

が仏文科の学生だったことを覚えていてくださったのだろう。もちろん二つ返事でお受けした。真夏の東神大の冷房などあるわけもない図書館にこもり、インド神学者の強烈な体臭と、ドンガラガッタ・ドンガラガッタと聞こえてくる英語や、分厚いカルヴァン全集と格闘した思い出は懐かしい。

ところで、これほど森井先生との関わりがありながら、実はまだお目にかかったことがなかったのは、どなたもなかなか信じてくださらないが、ぼくがひどく人見知りする質だからである。したがって、先生との出会いは思いがけない方向からおこるのである。

音楽が好きで、なにか自分にもできることをとっていたところ、バツハ合唱団というのがあると聞き、家内と一緒に練習を見学に行った。あとで分かったことなのだが、この合唱団の主宰者が森井先生の元奥様で、先生も当然ながら団員として歌っておられたのである。「森井です」といわれたときにはほんとうに驚いた。頭が真っ白になり、あとがどうなったのかまったく記憶にない。

合唱団での週1回のおつきあいがつづくあいだに、ぼくのほうはまた仏文の世界に舞い戻り、やがて獨協大学のフランス語科に就職していたのだが、そこでまた驚天動地の出来事が森井先生によってもたらされた。2月のある日、突然先生が「明治学院に来ませんか」と、まるで映画見に行きませんかといった口調で電話してこられたのである。2月ともなれば教師の異動は大学からきられる話なのだが、森井先生は遠くまで足を運んで説得にあたってくださり、かくして1971年4月から、森井先生の同僚として明治学院大学の一員になれたのは晴れがましいことであった。

それだけではない。獨協大学もなかなか

楽しい世界で、それなりに十分満足していたのであるが、ただそこはキリスト教主義の学校ではなかった。神学大学から逃げ出したヨナのごとき者が明治学院に連れ戻されたについては、逃れようもない神のみ心を感じざるを得ないのである。(続)

(まざき たかはる)

所員・教養教育センター教授)